

「神の声」

主任司祭 晴佐久 昌英

復活祭をもって、晴佐久神父は多摩教会へ転任することになった。李神父は目黒教会へ。澤田神父は引き続き高円寺教会である。

もう変わりたいと自ら司教に願ったのではないかと勘ぐる声を聞いたが、生来無責任で「言われるがまま主義」のぼくに関しては、それはありえない。変える変えるなにせよ、あっちがいいこっちは嫌だにせよ、自ら願ったりしたら自らの責任になってしまうではないか。その後何があろうとも、自分が願ったんだから自分のせいだと思いつけなければならないなんて、ああ恐ろしい。

今回、転任の目安である任期六年を迎えた司祭は皆、司教に呼び出されて希望を聞かれた。こちらとしては何ひとつ希望はないので、「司教様が右と言えば右、左と言えば左、消えろと言われれば消えます」と申しあげたら「ふふふ」と笑っていた。ちなみに、あえてどれか選べと言うなら「消えろ」である。もちろん、給料付きでだが。

司教の声は、神の声。そう信じていれば、右に行こうが左に行こうが、心は穏やかである。そこで何があろうとも、これは神の御心なんだからきっと何か深い意味があり、きっと美しい未来が待っているに違いないと思える。もしもそこに自分の貧しい経験からくる浅はかな考えなどを差し挟み、右がいいだの左は嫌だの言ってしまったら、そんな神の御心を乱すことになるのではないか。

六年前の転任時、仮にこう言ったとしよう。「司教様、高円寺は以前もいたところで新鮮味がありません。信者数も多く向いていません。そもそも私、シスターアレルギーなんです」。

そう言ったなら、この六年はなかった。ない方がよかったと言われればそれまでだが、たとえどうなろうとも、やはりぼくは、自分の声ではなく、神の声が示す地平を見てみたい。そこでどんなことがあろうとも、ここに神の御心が現れていると信じて感謝と賛美を捧げる日々を生きていきたい。

誰にとっても、必ずそんな「神の声」があるはずだ。信じる者にのみ聞こえる声だ。